昭和57年３月10日

佐賀県立博物館報 No.56

佐賀市城内１丁目15番23号　TEL 0952(24)3947

鍋島段通 蟹牡丹唐草文

（一九一・〇×九一・〇）　江戸末～明治初期

この段通は、蟹牡丹と唐草文を組み合せたもので、鍋島段通の伝統的な図柄である。地の部分は白色で、蟹牡丹は褐色とうすい褐色（ベージュ）と青色で、唐草は緑色と藍色で褐色で縁どりされている。周囲をめぐる雷文は、褐色の地に藍色で入れられている。全体として落着きがあり、しかも格調高いものである。

目　次

○鍋島段通蟹牡丹唐草文……1
○肥前の大甕作り－相知町横枕窯の記録(1)－……2～3
○佐賀県における洞穴遺跡の立地（その１）……4～5
○鍋島段通のウィーン万国博出品のこと……6
○県内博物館案内（その12）……7
○博物館日誌、当館で発売している図録紹介……8
○休館のお知らせ……8

資料調査

肥前の大甕作り　―相知町横枕窯の記録(1)―

江戸時代の陶製大甕を焼いた押川窯の伝統を今日まで継承してきた相知町の藤田製陶所で使用した貴重な製陶用具一式（99点）がこのたび当館に寄贈された。

東松浦郡相知町横枕の藤田勇氏（明治41年生）は叩き技法で大形甕を作って60年、庶民の日常生活に不可欠な実用的な焼物一筋であった。しかし戦後の生活様式の変化で大甕の需要は減り、また体力を要する甕作りは年々困難を増していき、昭和53年の窯焚きを最後に肥前の大甕作りはついにその火を消したのである。

今日、民家の庭に放置された大小さまざまな褐色の甕類は、飲料水や米麦の貯蔵容器・各種醸造の用具として重宝なものであった。カマヤには、ヘッチィサンやクドとともに、木蓋をした大甕が２～３個据えられていた。大甕はハンズーガメ（飯胴甕）とよばれ、押川甕とも総称されてきた庶民の器であり、死人甕としても使われた。

横枕窯の藤田勇氏が粘土紐巻上げと叩き技法によって大甕を製作することに着眼した当館学芸員の森醇一朗は折にふれ調査を行っていたが、昭和53年９月に学芸課で記録を作成し、聞き取り調査も数回実施した。更に九州大学の横山浩一教授（比較考古学）が主宰して、藤田氏の実演を採録する調査が昭和55年４月に行われ、当館も参加・協力した。横山調査の成果はこのたび、横山浩一「佐賀県横枕における大甕の成形技術―現存する叩き技法の調査―」（『九州文化史研究所紀要』第27号　昭和57年）として発表された。

横山氏は、「藤田勇氏が伝承する肥前大甕の成形技術において、核心をなす要素は、粘土紐巻き上げ技法、叩き技法、蹴り轆轤の使用、焚火による強制乾燥である。」ことを上記の論文で指適した。成形に重要な道具が朝鮮系の名称で呼ばれ、朝鮮の現存製陶技術と細部においても多くの共通点をもつことから、朝鮮系の技術であると認定しつつも、「肥前における大甕製作技術の成立過程については……諸方面から、追求すべき余地が大きく残されている。」（同上論文）ことを強調している。

大甕の成形方法（昭和55年４月調査の概要）

まず調整した土を適当量切り取って、床上でころがして長さ１m弱の粘土棒を準備する。次に車（ロクロ）の鏡に灰を振り、据えた粘土塊を底打ちで叩いて円盤を作り、甕底の大きさに余る粘土を底切りのヘラで切る。底部の縁に粘土棒をひねり付けて器壁を一周巡し、更に同様の手順で６段目まで積み上げる。この間に段間の継ぎ目を指でなでつけるフセメツギを行う。格子目刻みのついたトキャアとシュレで下から上へ叩きながらロクロを一回転させる。次に刻み目のない裏面で同様に叩いたのち、フィデを器壁の内外に当てなでる。叩き作業に入るときからロクロのそばで火を焚き器壁の乾燥を早める。叩き作業で甕の下腹から底部にかけての形が出来ると、細ナワを4周ほどかけ要所を粘土で留めたのち、器壁を3段積み上げ、外面だけフセメツギをする。ヒッツイバチ（火吊り鉢）を自在カギで甕の内側に吊って内面のフセメツギを行う。次にシュレの刻み目面で叩き、更に裏面で叩く。フィデでなでたのち細ナワをそこに３周巻き、10～12段目を積み上げてシュレで叩く。なでが終わると細ナワを巻き付け、内側の火を上部へあげる。更に13～17段目を積み上げ、シュレで叩いたのち、フチトリガワを水にぬらしてなでたのち今度はシュレの刻み目のない裏面で叩く。相方の奥さん（タケ夫人）がヒッツイバチを取り外したのちロクロの横に側臥し、水車を踏むようにしてロクロを回転させ、勇氏が内外面をフィデでなでる。続いてロクロの回転を利用してフチトリガワで口頸部を作り、胴部上半をフィデでなでる。細ナワをはずして更にフィデでなでて完了する。完成品は中二石（別名が男甕、容量１石）で、口径64cm、高さ93cmである。器壁積み、フセメツギ、叩き、フィデによるなでの工程を４回行い、

藤田製陶所の工場（左）と窯（右奥）

甕底に粘土棒をひねり付ける

叩いて下腹から底にかけて成形

フィデで器壁を整える

所要時間は1時間40分であったが通常は1時間10分ほどで完成する。16〜17段の積み上げを行うが使用する粘土棒は13本位である。1周の積み上げに要する時間は円周の長さに余り関係なく各段とも3分前後である。成形と各種の用具の名称及び使用法については稿を改めて述べることとし、藤田氏の聞き取りを交えて横枕窯の大甕作りとその生活の変遷をみてみよう。

押川窯と横枕窯　松浦川支流の厳木川を挟んで横枕の対岸側の相知町押川は江戸時代中期以降は大甕作りで有名であった。押川窯は唐津藩主、水野忠任の時、すなわち明和3年（1766）に押川此右衛門が銀20匁の運上（税）を納めて開窯したという。(『相知町史』下巻　542頁 1977）同書によれば押川窯の盛衰は変転激しく、江戸時代末期には押川窯は廃絶された。木崎攸軒盛標が唐津領内の諸々の生業と物産を描いた『肥前国産物図考』のうち第7帖（天明4年）の「焼物大概」の大甕作りは押川窯を紹介したものであろうか。

押川窯で働いていた藤田類吉・卯平の兄弟が横枕の丘陵に窯（上のカメ山）を築き、甕を焼きだしたのは明治元年（1868）頃のことである。横枕窯の全盛期は大正の初め頃で、7軒の窯元が共同窯を利用した。ロクロは桃の川や多々良の職人がきたが、荒仕子やこどりとして横枕部落の半数はカメ山と関係していた。

藤田製陶所　勇氏は類吉の系で、尋常小学校高等科を卒業後（数え15歳）父の幸太郎から技術を学んだ。昭和3年に小松酒造の土地を無償貸与してもらい現在地に工場と窯を築いた。この藤田製陶所の工場は千束の太郎丸に40坪、窯場は厄神森（ヤクジンモリ）に80坪の敷地であった。窯周辺の土地の使用も自由にまかされ、今も同酒造の好意に感謝する藤田氏の語り口は感慨深げである。窯は4室の連房式登窯でトタン葺きの覆屋の横に薪小屋と仮寝するための小屋が付設されている。窯はカマツキさん4〜5人が泊りこみで10日間ほどかかって築いたもので、窯と覆屋で千円を要した。小規模な窯の補修は自分で行う。窯のヒビ割れに粘土を塗るには稲虫駆除用のホテに似た、竹棒の先にワラを束ねた道具を使う。

藤田製陶所の最盛期にはロクロを4台おき、年に4回ほど窯焼きしたが、廃業前は2回となった。一人前の職人は昔は1日7本の甕を作ったが、後には5本が勇氏の1日の仕事量であった。大正時代までは「二石」までの大物を作ったが、以後は合（アイ）二石（容量1石2斗）から中（チュウ）二石（同1石）以下の甕を作った。製品の名称と容量は相知と武雄の方では異っていたが、戦後に同業組合で呼称を統一したというが聞き取りでは正確につかめなかった。参考までに容器類の名称等をまとめると下記の表のとおりである。

昭和3年以来の製品は各種の大甕のほか、醤油・ミソ甕、こね鉢、コンニャク摺り鉢、タコ壺、土管、便所甕等で、いずれも叩き技法で成形した。土管を押し出す機械を戦後に導入してからはタコ壺作りにもこの機械を利用した。土管は内径で1尺から3寸まで規格があり、長さは大小に拘らず2尺であった。

米1俵が4円の時で1窯焼き上げて70円分であり、「こうまでしてやらんと食べられないか」と思うほど仕事は楽ではなかったという。勇氏が出征中は雇いの職人とタケ夫人で窯焼きを続けたが、昭和18年頃からは、夜間窯から火がもれるので休業を余儀なくされ、3年間ほど中断したのであった。(続)　〔藤口健二〕

名称	容量		名称	容量
五石	4石	10俵	大味噌	2斗
四石		(8俵か)	中味噌	1斗5升
三石		(6俵か)	小味噌	1斗
大二石	2石	5俵	大寸切（ダイスンギリ）	1斗弱
相（アイ）二石（合）	1石2斗	3俵	中寸切	8升
中二石〔男ガメ〕	1石	2俵半	小寸切	5升
大天〔女ガメ〕	8斗	2俵	大摺鉢	
八斗	4斗	1俵	中摺鉢	
六斗	3斗		小摺鉢	

※このほか、中天、一石八斗（天保四年の記録）、小六斗五升ガメ、三升ガメ（大正・昭和代）の名称が知られる。

フセメツギの状況

強く叩いて胴部を成形

フチトリガワで、口頸部をつくり完成

研究メモ 1

佐賀県における洞穴遺跡の立地（その1）

① はじめに

昭和30年代の後半、長崎県北部に点在する洞穴遺跡の発掘調査が始まると、西九州における旧石器時代から縄文時代にかけての層位学的編年研究に、多大の成果をもたらすようになった。そこで、昭和40年に西有田町の国見山中で「盗人岩洞穴」が発見されると、とくに砂岩層の露出する県内西北部地域において、洞穴（岩陰）遺跡の所在が注目された。

その結果、砂岩層の風化作用によって形成された洞穴には、白蛇山岩陰（伊万里市）・源平岩洞穴（伊万里市）・百田洞穴（肥前町）・玄蕃ヶ岩（肥前町）・鳥の巣洞穴（肥前町）・大園洞穴（玄海町）・相知岸岳洞穴（相知町）・長尾洞穴（相知町）・立石観音洞穴（相知町）があり、玄武岩あるいは流紋岩の崩落によって形成された洞穴に、儀助平洞穴（鹿島市）・竜門洞穴（西有田町）の所在が確認された。

しかし、洞穴の県内における分布状況の確認作業は一部地域に限定され、砂岩層の露出する地域にまだ多くの洞穴が存在するものと推定されている。

② 砂岩層に位置する洞穴

砂岩層の風化作用によって形成された洞穴には、山間部に位置する洞穴と海辺に位置する洞穴とに二分することができ、発掘調査が実施された洞穴は盗人岩・白蛇山・源平岩・百田・相知岸岳がある。

標高100m以上の山間部に位置する洞穴は、盗人岩と白蛇山がある。盗人岩は国見山系中尾岳の標高約360mの高所に位置し、九州では最も高位置の洞穴で、山麓南面に開口している。洞穴の規模は横幅12m、奥行6mと比較的小形で、洞穴前面の平坦部分は約100m²と狭いが、その前方は急角度の傾斜で狩猟生活を行うには視界の良好な立地条件下にある。また、洞穴東側約100mの地点には湧水地が位置している。

白蛇山岩陰遺跡は、国見山系の標高約100mの地点に東南方向に開口する。岩陰の規模は横幅40m、奥行6mと比較的浅いいわゆる岩陰で、県内では最も規模の大きい洞穴（岩陰）である。遺跡の直下には清流が流れており、近接して湧水池もある。遺跡の東方には腰岳があり、盗人岩洞穴と同様石器の素材として黒曜石を多量に使用している。

相知岸岳洞穴遺跡は、標高100mの地点よりやや低い80mの標高上に位置するが、山間部の洞穴の一つとしてとらえられる。この洞穴は東に向かって開口しており、横幅18m・奥行6mの規模を有し、生活の場としての洞穴前庭部が最も発達している。しかし、他の洞穴とは異なり、弥生時代中期の土器群を最も多量に出土するところから、弥生時代に最も使用されていたと推定できる。

このように、標高の高い地域に形成されている洞穴は、生活の主体を狩猟にたよっていたと推定されるが、盗人岩洞穴は遺跡の立地と遺物の出土状況から、狩猟時に一時的に使用したキャンプ地であったと考えられる。一方白蛇山岩陰は、遺物の出土状況からある程度の定住が行われていたことが推定され、標高100mの地域は山間部の狩猟生活と海辺における漁撈生活を併用して実施することができ、食生活の安定をはかるには適した場所であった。

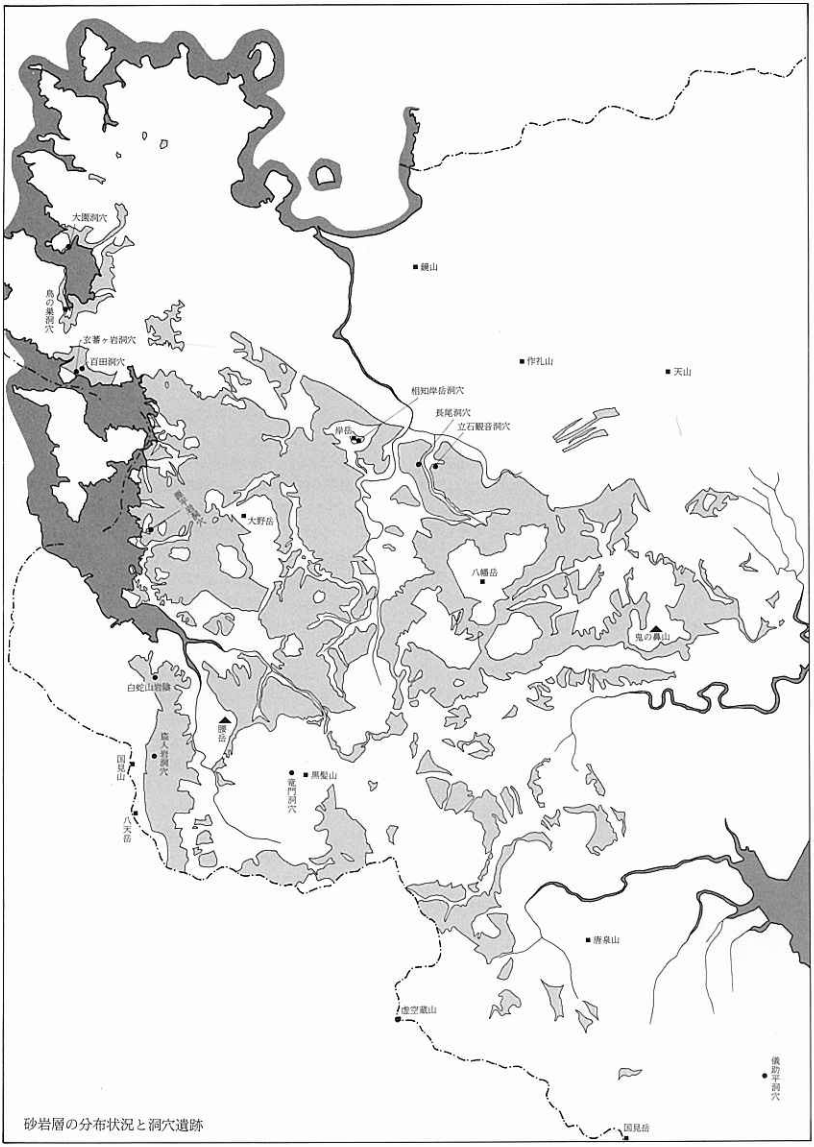
相知岸岳洞穴は、弥生時代中期の土器群を多く出土するところから、水田耕作に適する河川の流域に生活の主体が置かれていたことはいうまでもないが、水田耕作地に限定された洞穴の所在する河川の上流地域は、一部山間地帯にも縄文時代と同様に生活の場が営なまれていたことを示している。しかし、あくまでも住居の場としての洞穴使用であって、食糧生産の場は河川流域の水田であったことはいうまでもなく、縄文時代に使用されたと同様の狩猟用石器の出土は確認されない。

海辺に位置する洞穴で、発掘調査の実施されたものに源平岩洞穴と百田洞穴とがある。

源平岩洞穴は標高15mの地点に南に開口する洞穴で、横幅15m・奥行6mの規模を有する。洞穴は波浪を有するところから、波による浸蝕作用によって形成されたもので、海岸線まで極めて近い距離にある。このことから、洞穴の前庭部には伊万里湾で採取することのできる貝殻が多く堆積をしており、いわゆる貝塚を形成している。洞穴で貝層を鮮明に残存する遺跡は、源平岩洞穴を除いて他に例はない。

百田洞穴も海岸線に位置する洞穴で、標高42mの地点に南に開口しており、横幅21m・奥行5.5mの規模を有する。洞穴は風化作用によって形成されており、前庭部は海岸の方向に急激に落ち込んでいる。この洞穴内での遺物の出土状況は、石器の出土量に比較し土器の出土が極端に少ない。このことは、この洞穴における住居としての定住はなく、盗人岩洞穴と同様に狩猟と漁撈時の一時的なキャンプ地としての利用がなされていたことを推定することができる。食糧の確保のため、上場台地の狩猟と伊万里湾での漁撈が併行して実施されたものと考えられる。

このように、砂岩質の洞穴は自然の作用によって形成された家屋として、利用するには充分な規模であったと考えられるが、立地の条件やその規模において若干の差異は認められる。（次号へ）　〔森醇一朗〕



砂岩層の分布状況と洞穴遺跡

研究メモ 2

鍋島段通のウィーン万国博出品のこと

「扇町紋氈之名世に於るや久し、而して之を製する者蓋し古賀清右衛門自始むと言ふ…」

これは佐賀市嘉瀬町苗運寺内に残る、いわゆる段通碑の碑文の冒頭部分である。初代佐賀県令鍋田景弼が、鍋島段通の創始者といわれる古賀精右衛門の没後180年をへて明治になって再び生産が盛んになったことをたたえて、明治17年に建てられたものである。

碑文によると、創始者の古賀精右衛門は佐賀扇町の人で、代々農家であった。その傭人が諸国をさまようううちに、外国で織氈を習った者に出会い、精右衛門が試しに織らせてみると、これが実に美しい。それで、この技術の一部始終を習い、のち町内の者12戸にも伝授して「扇町紋氈」と称して売ったという。時の藩主鍋島侯は大いに賞讃し、扶持米を与えて保護し、また御用品として一般の売買を禁じた。古賀精右衛門は元禄12年に死に、その没後180余年を経た明治17年、その業績をたたえ、また特賜金を賜ったことを感謝してこの碑が建てられたというわけである。鍋島段通について記された記録はじつに少なく、特にその起こりについては、唯一この段通碑だけであるといってよく、のちの鍋島段通についての記述は、ほとんどこの碑の碑文によっている。

鍋島段通はいわゆるパイル織物で、このパイルをもつ敷物としては日本最古のものであろう。しかし何にもまして、その図柄の優雅さ、手ざわりの良さ等で大いに称賛された。それは、数寄屋風の室内にもよく調和するため、風雅を愛する人々にも喜ばれた。しかし、藩政時代は御用品として、大名などへの土産品として用いられたにすぎず、生産数も少なく高級な敷物であった。

これが、一般の人々のものとなるのは、明治以降である。明治39年発行の『佐賀縣案内』の「佐賀緞通」の項に「明治3年佐賀の人大島貞七始めて工場を設け織工を督して織出に従事せり」という記述が残っている。生産高は、1年間で300枚、価格は、11円から13円50銭程であったという。年間300枚というのは、けっして多くはないが、一般の人々にも手に入れることができたわけで、一つの大きな転換期であったといえる。

明治6年オーストリアの首都ウィーンで万国博覧会が開かれた。鍋島段通は、明治維新の転換期をむかえて間もないこのウィーン博に出品し、その優秀さが認められ、賞を受けたのである。このウィーン博出品は、これまであまり問題にされなかったが、世界中の文物が集まる万国博に出品し、受賞したことは、その名を内外に知らしめたということに於いても、大きな功績であった。

ウィーン博は、明治政府が初めて参加した万国博ということで、幕末慶応3年のパリ博での経験も考慮して、日本の工芸品の優秀さをひろく認識させ、西洋の技術の導入の糸口にするために、(1)優秀な天然物、人造物を示し、「国土の豊饒と人工の巧妙を以て、御国の誉与を海外に揚」げること、(2)外国の出品物から「西洋各国の風土物産と学芸の精妙とを看取し、機械妙用の工術を伝習」すること、(3)この機会に博物館を創設する土台を固めること、(4)好評を得て輸出増大の基礎となるように配慮すること、(5)外国の有名物産の状態や価格を調査するとともに、外国が必要としている物品をさがして貿易拡大の資料とすることという目的を設けて参加した。

この参加目的など博覧会の諸報告をまとめた『澳國博覧会参同記要』の中に鍋島段通の名が認められるのである。第27章、澳國博覧会後本邦輸出品1状況には、ウィーン博参加にともない、その物品販売にあたるべく設立された起立工商会社の設立の経緯が記され、つぎに陶器、銅器、段通、絹織物など、11品目について各項目ごとに当時の物品の輸出の状況を述べている。

その段通の項に、「段通ハ肥前製ノ物ヲ出品セシニ當時既ニ外國用ニ適スルコトヲ認メラレタリ」とあり、のち明治9年のフィラデルフィア博には大阪の堺段通が出品され、続く明治11年のパリ博にも堺段通が出品され、フランスから、1万ヤールの注文を受けたことなどが記されている。

そして前出の『参同記要』の附録、第五澳國博覧会賞状及賞牌頒與表によると、鍋島段通は第五区織物、組物、織物ニ為スベキ糸1類、衣服1類、及衣服ニ附属スベキ物1類に出品し、第三賞典有功賞牌を受賞している。この時、大阪府も綿段通で進歩賞牌を受け、敷物類で受賞したのは、この2府県だけである。

鍋島段通は、明治以降、製造の禁制を解かれ、明治6年ウィーン博に出品、賞を得て、一般に広く知られるところとなり、最盛期をむかえる。しかしそれを知る手段はない。ちなみに『佐賀市史』（昭和27年発行、昭和48年覆刻）に、その後の生産額を追ってみると、大正2年3,750円・大正3年518円・大正4年1,066円・大正5年1,275円・大正6年4,600円、そして昭和10年には、製造戸数2戸、織工5人、数量360畳、価額7,200円となっている。

しかし、盛期を極めた時代も長く続かず、やがて近代的な機械織りに主導権をうばわれ、しだいに衰退していった。昭和20年代末には、原田、吉島の2戸のうち原田家が廃業し、、現在福岡県久留米市内に移った吉島段通で唯一織りつづけられている。

明治維新によって旧体制が倒れ、鍋島段通も、その製造の禁制を解かれ、一般の製織が自由となったが、それは逆に言えば、保護を失ったわけで、製造家は自らの手で市場を開拓しなければならなくなったのである。ウィーン博での出品、受賞で、その優秀さが認められたが、やはり伝統的な手織りの段通は大変な労力と時間が必要で、機械生産のものに取ってかわられる結果となったが、今なお、その優雅で格調高い段通が、細々とであるが生産がつづけられている。そして望むべくはこの現在に生きづく伝統わざを永く生きつづけることが願われる。

〔宇治　章〕

県内博物館案内　（その12）

多久市歴史民俗資料館

○所 在 地　多久市多久町1975番地
　　Tel　09527-5-3002
○交通の便　国鉄多久駅からバスで約10分
　　（市立病院前下車）
○開館時間　午前９時から午後４時まで
○休 館 日　火曜日、国民の祝日、年末年始（12月29日～１月３日）
○入 館 料　無　料
○環境と歴史

旧石器時代の石器製造跡といわれる三年山・茶園原遺跡、李参平が日本で最初に陶器を焼いたといわれる唐人古場の古窯跡、聖廟の木造建築では一番古いといわれる「多久聖廟」それに散在するくど造りの民家など、多久は多くの文化財や史跡に恵まれている。多久はかつては鎌倉時代摂津から下向した御家人多久太郎宗直によって治められたといわれる。近世初頭は竜造寺隆信の弟長信の配地であったため、藩政期では佐賀鍋島藩の親類同格の家格であった。多久はもともと石炭にめぐまれ藩政時代後半から昭和に至って、小城・多久・三菱炭鉱等の出炭で盛況をきわめ、農業とともに町の基幹産業となった。昭和29年、炭鉱都市形成を目指し、北多久・多久・東多久・南多久・西多久の５町村合併で市制を施行した。現在、面積約97㎢、人口約２万６千人あまりの小さな市である。

多久市歴史民俗資料館は多久駅の西南方にある西溪公園の中に建てられている。この公園はもともと多久家の館の一部で、大正13年(1924)、石炭王高取伊好が私財を投じて、図書館、公会堂を建設し旧多久村に寄贈したところである。多久市歴史民俗資料館はこの図書館の一角に建てられたもので、当時の赤レンガ造の書庫は現在、多久家・後藤家文書（佐賀県重要文化財）等を収蔵し、新築された展示場には郷土の民俗資料を展示している。

○設立の趣旨と特色

多久市歴史民俗資料館は、市内に所在する民俗資料・生活資料・石炭資料・埋蔵文化財等歴史資料の保存活用をはかり、諸資料の収蔵・展示をするため建設された。建設着工は昭和55年11月１日、竣工は昭和56年３月31日、鉄筋コンクリート造平家建、展示室・行政資料収蔵庫・文書収蔵庫・事務室を含め、建築延面積225.5㎡、建設費は国庫補助・県費・市費を合わせ40,218,000円である。

おもな業務は資料の収集、整理及び保存、資料の展示、公開、調査研究等であるが、丹邱の里〝多久〟をしのばせる資料館として、今後ますますの充実発展が期待される。

○展示概要

◇石炭資料

石炭は多久の歴史の中で重要な産業であり、炭坑を懐古できるものを展示。

１、採炭用具　ノミ、サク岩機、ガス検定器他。
２、坑　道　　トロッコ、石炭サンプル、写真、他

◇生産・生業に関するもの

多久の昔の産業は農業が主体であり、副業として養蚕、炭焼、漁撈、製茶、製紙などがあり、それらの用具を展示紹介している。

◎農耕資料

１、耕作用具　田植綱、鍬、鋤、馬鍬、他
２、管理用具　油さし、誘蛾燈、ガンヅメ、田押車他
３、収穫調整用具　鎌、千歯、鬼歯、万石、唐臼、他

◎養蚕・機織用具

１、飼育用具　種紙、掃立て、上簇等用具、他
２、収穫処理用具　繭繰り機、糸巻き、糸車、他
３、機織り一式

◎その他、副業用具　紙、炭焼、漁撈、製茶に関する用具

◇衣・食・住、に関係する民具

江戸時代、明治、大正、昭和初期の生活がうかがえるものを展示。

１、衣　着物類、結納、化粧用品、裁縫、洗濯用具、他
２、食　貯蔵、炊事、醸造、製造用具、嗜好用品等
３、住　屋敷（写真・見取図）建具、いろり、火鉢、タンス、他
４、その他　医療、計算、計量、玩具等

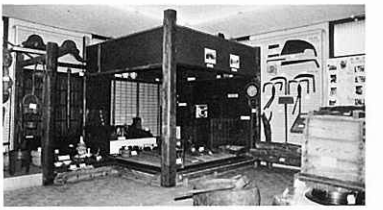
◇屋外展示

馬車、車力、古墳復元、他

◇参考資料

１、消防用具　手押ポンプ、まとい、ハッピ等

〔森永　茂〕



▲展 示 風 景

博物館日誌（S57．1．17～S57．3．11）

1月17日　書初展（1月21日迄）
1月30日　佐賀県勤労者美術展（2月4日迄）
2月9日　九州グラフィックデザイン展（2月14日迄）
2月20日　佐賀大学教育学部美術工芸科卒業制作展（2月24日迄）
3月11日　岩永京吉・太田香雲展（3月14日迄）

― 当館で頒布している図録紹介 ―

「岡田三郎助展」図録（頒価￥1,700　送料￥250）
昭和54年7月に行われた「岡田三郎助展」に伴い刊行されたもので、カラー32頁に作品32点、白黒44頁に作品102点を紹介。
明治、大正、昭和を通してわが国洋画界の発展に尽くした岡田三郎助(1869～1939)の年譜、出品目録を掲載。113頁

「鏡・玉・剣」図録（頒価￥1,500　送料￥250）
昭和54年10月に行われた「古代九州の遺宝展」に伴い刊行されたもので、九州各地より出土した弥生時代から古墳時代にかけての遺品「鏡」「玉」「剣」を主にとりあげ、カラー5頁を含め237頁。

「玄界のくじら捕り」図録（頒価￥1,400　送料￥250）
昭和55年3月に行われた「玄界のくじら捕り展」に伴い刊行されたもので、西海捕鯨の歴史と民俗についての論考、資料、関係年表などを掲載。145頁

「古賀忠雄彫塑展」図録（頒価￥1,300　送料￥250）
昭和56年4月に行われた「古賀忠雄彫塑展・山口猛彦洋画展」に伴い刊行されたもので、カラー8頁に作品8点、白黒55頁に作品66点を紹介。
彫塑界に大きな足跡を留めた古賀忠雄（1903～1979）の略年譜、作品目録などを掲載。107頁

「山口猛彦洋画展」図録（頒価￥1,000　送料￥250）
昭和56年4月に行われた「古賀忠雄彫塑展・山口猛彦洋画展」に伴い刊行されたもので、カラー8頁に作品8点、白黒40頁に作品75点を紹介。
日展作家として活躍した洋画家山口猛彦(1903～1979)の年譜、作品目録を掲載。65頁

「近代日本画展」図録（頒価￥1,600　送料￥250）
昭和56年10月に行われた「近代日本画展」に伴い刊行されたもので、カラー16頁に作品14点、白黒46頁に作品76点を紹介。
明治以後の日本画の巨匠、横山大観、菱田春草、下村観山、前田青邨、小林古径、安田靫彦をはじめ、佐賀県出身の高取稚成、納富介堂、野口謙次郎らの略歴、日本画についての論考などを掲載。77頁

休館のお知らせ

佐賀県立美術館（仮称）建設に伴う当博物館の一部改造工事のため昭和57年4月1日から6月2日までの間休館いたします。

博物館報	第56号
発行年月日	昭和57年3月10日
編集	永原正隆
発行	佐賀市城内1丁目15～23 佐賀県立博物館
印刷	佐賀印刷社